

シヤンティ

shanti

2012
秋
10月号

特集

こころの復興と図書館





「学校図書館」の活用を促すために、カンボジア事務所では建設する小学校に図書館を併設する「ドリーム小学校 (DPS)」事業、教員や地域住民が図書館を十分に活用できるように研修会などを行う「住民参加による学校図書館運営 (IMSL)」事業を始めました。

①学校に併設する図書館が作られる ②図書室が無く教室の隅に本を置いている小学校
③本も備品も乏しい図書室 ④本と設備があっても使われていない図書室は運営面に課題がある
⑤ SVA スタッフから地域住民に図書館の大切さを伝える説明会 ⑥運営についても学ぶことができる図書館員の研修会

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project

カンボジア
「小学校図書館スタンダード」の制度化
すべての小学校に図書館を!

カンボジアの6849小学校で、図書館を置いている学校はおよそ半数。ここまで増えた背景には、SVAを含め多くの団体の活躍と2005年から教育の質の向上を訴えた政策の後押しがあります。学校図書館が広く認識される一方、教育現場にはどのように設立、運営したら良いのかわからない、という悩みがありました。

教育省が音頭を取り、図書館に関わる3団体SVA、RTI、K h (Room to Read-Cambodia)、SIPAR (Souren à l'Initiative Privée Pour l'Aide à la Reconstruction) が連携。2年の活発な議論を経て、各団体の活動経験をまとめ「小学校図書館スタンダード」の制度化が、2011年実現しました。これは

道

巻頭言

SVA 図書館の源流

顧問 荒巻裕

「Anybody can speak English?」

誰か、英語をしゃべれる人はいませんか? 1980年5月、タイ、カンボジア国境であらん限りの声をふりしぼっていた。眼前には戦闘が始まった国境線から血相を変えてタイ国内に逃げ込んで来るカンボジア難民たちが殺到し、

駆け抜けてゆく。毎日新聞の記者である私は、流れに逆らって取材を続けていた。

「Yes, I can!」は「私、できます。妹の手をしっかりと握り絞めている1人の娘が立ち止まってくれた。戦場から逃れて来る難民には、コメと鍋と鉄を担いでいる親たちが多かった。コメと鍋は命の糧、鉄は戦闘が休止した時に穴を掘り、我が子や妻をかくまうためである。しかし、娘は汚れた布袋を肩から下げていただけだった。「君は何を持って逃げて来たの?」

娘は袋から看護師になるための教科書と英語の辞書を取り出した。「いつかきっと、もう一度、看

護師になる勉強が出来ると思うから……」

その姉妹が保護されたカオイダンの難民キャンプで、SVA (曹洞宗国際ボランティア会) は子どもたちに絵本を贈る支援を開始した。重度の栄養失調や病で亡くなる人が多いのに、なぜ絵本なのか? 周囲の理解をなかなか得られない創設者・有馬実成さんたちの心を支えたのは難民となった母親たちの言葉だった。

「ないものはかりだけど、笑顔を忘れた子らに、絵本を読ませてやりたい」

雑木を組み合わせただけの図書棚から、1人の母が1冊の絵本を盗もうとした。咎めると、「第三国

に移り住んでも、ふるりの国を我が子が忘れないようにと思っ……」

絵本は、人間としての感動を取り戻す原点になりうる。有馬さんたちがそう確信し、バトンが継がれ、継がれて今がある。

◎荒巻裕 (あらまき・ゆたか)
近畿大学副学長兼総合社会学部部長。一橋大学社会学部卒業。毎日新聞社に就職。1984年から1990年までバンコク特派員。東京本社外信部副部長を経て1992年から近畿大学で教鞭をとる。

編註「曹洞宗国際ボランティア会」はSVAの旧称。1999年の社団法人化の際に「シャンティ国際ボランティア会」に改称した。

学校図書館の設立・運営に関して、図書の数・配架方法・図書管理方法等に、具体的な基準を定めたものです。

現実には教育省が学校に配分できる予算は限られており、図書館を継続的に運営・維持・管理していくことは、小学校の大きな課題です。SVAでは2012年から地域と共に運営する学校図書館を推進する新規事業を開始しました。教育の質の向上へと貢献していきます。(カンボジア事務所長 山本英里)

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。



Cover Photo

「かねざわ図書室」がオープンして8カ月。地域の図書室であるとともに、大船町・山田町の移動図書館の運行拠点として、約1万2千冊の蔵書を準備



移動図書館活動が

はじまるまで

被災地では図書館も大きな損害を受けていました。SVAは市川斉と鎌倉幸子を現地に派遣し、その調査の結果を受け、移動図書館事業の開始を決定しました。

{ 特集 }

こころの復興と図書館

東 北の地で、昨年7月17日から仮設住宅を回る移動図書館を始めました。軽トラックの荷台に本棚を載せた移動図書館車には500冊の本。本を借りるだけではない、コーヒーやお茶で会話が始まる「お茶飲みどころ」にもなりました。

SVAの過去の経験、1980年代のカンボジア難民、ラオス難民、そして現在も続くミャンマー（ビルマ）難民、貧困に追いやられたスラムの人びと。困難な状況に置かれた人びとに寄りそう活動は本と共にありました。

そこには1999年7月、カンボジアで有馬実成が語った「図書館活動と出版はSVAの原点と言うべき活動である」という理念があります。「出版は自己を表現する方法である。そうして図書館は自己発見をする場所である。自己を発見したら、人間は人に伝えたいという気持ちが湧いてくる。その手段の一つとして文字にして表現する、言葉を使って表現をすることである。そうして表現をすることにより、物事を客観的に見るようになるようになる」と。



4

事務所探し

5月下旬、事務所を探しました。移動図書館を行う上で、最低2万冊の蔵書は確保したいので、広いスペースは不可欠。震災で家を失った方がいるのに、沿岸部で物件探しをするのはためらう気持ちもありました。他団体も県内陸部から通っているところが大半だったため、遠野市役所「でくらす遠野事務局」を通じて、元縫製工場だった物件を見つけました。



(イラスト:清原笑子)

3

一人ひとりの声をつむぐ

避難所で耐え忍ぶ皆さんの支えになるため「移動図書館を動かしたい。でも今はできない」と語った図書館員。「親を亡くした子ども」のそばにはいつも本がある」と伝えてくれた新聞記者。そして市町の教育委員会が「移動図書館をやることに決まったらいつでも連絡をください。一緒にやりましょう」と言ってくれたこと。その声と思いを重ねて活動計画を作っていました。



2

図書館や本がなくなった土地で

東京から移動に時間がかかる岩手県に入る団体が少ないことが課題となっていました。5月上旬、私と市川次長が岩手県盛岡市、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市を回った際、見たものは壊滅状態の図書館と、流出して泥と油にまみれた本でした。人々が集い本を手にする空間、知りたいことを知ることのできる機会を取り戻すために何ができるかを考えました。



1

どうして図書館活動なの?

カンボジア事務所では図書館事業を担当していたので、図書館がどうなっているのか気になっていました。図書館活動の実施はまだ先のことだと、自分に言い聞かせていました。4月5日に宮城県気仙沼市の図書館を訪れた時、図書館員が、「こんな時だから子どもたちが、今、出会う本が人生の支えになると思います」と静かに、でも力強く語ってくれた言葉聞いて、「今だからこそやらねば」と確信しました。



5

岩手事務所の立ち上げ

何年も使われていなかった建物です。事務所として使うためには、掃除はもちろん、壁紙貼り、本棚作り、インターネットの設定などが遠くなる作業が必要でした。並行して、教育委員会との調整、仮設住宅を回り移動図書館実施のお伺い、書店の状況の調査、スタッフ採用などを行いました。多くのボランティアにお手伝いいただいた事務所整備を終え、7月17日の第1回目の運行の日を迎えることができました。

(鎌倉幸子)

いわてを走る移動図書館プロジェクトの1年

雨の日も雪の日も仮設住宅へ

岩手/山元事務所長 古賀東彦

昨年の7月17日、陸前高田市竹駒町にある仮設団地で、私たちの移動図書館活動は始まりました。初運行の翌日、SVA東京事務所などに送った日報が手元にあります。

岩手事務所開設後、一か月強。昨日、ようやく移動図書館活動をスタートすることができました。軽トラに本棚と本、机、テーブルを積み込んで、車4台、計12名で陸前高田市へ。/お客さんの中心は子どもたちでした。丸椅子にちょこんと座り、机に立てた本を少しだけ開いては閉じ、また開く。家に帰って読むのが楽しみ、でも待ちきれずにここで読んでしまおうかな……そんな、お話しの世界に入り込んでいく瞬間のわくわくした笑顔に出会えました。/疲れも飛びます。借りてくれてありがとう、そんな気持ちです。

が中心でした。今でも子どもたちはやって来てくれますが、利用者の中心は60代、70代以上の女性です。東北の方たちは口が重いものとおしゃやましても賑やかに話が弾みました。ただ、楽しく盛り上がりつつあると、ふいに津波に流されて家族を失った話に移り、それが次の瞬間にはまた別の笑い話に変わる、それが繰り返されるが多かったです。

移動図書館の活動は、一度始めたらやめられないと言われます。図書館車を待っている人との約束事だからです。本を借りたら返す。そうすればまた借りることができ。昨年の夏、大型台風が近づき、雨、そして強風の被害が心配な日に運行日がぶつかったことがありました。遠野にある事務所を出て、車で1時間ほどの沿岸の町大槌に行くかどうか最後まで迷いました。結果、行ってみようと思いのほか風も穏やかで、「こんな日にも来てくれるんだね」「台風で出かけるのやめたから、家で暇にしていたんだよ」と大勢の方が本を借りに仮設住宅から出てきてくださいます。

行くと決めた判断が正しかったかどうかはともかく、この日を境にこの仮設団地での運行は賑やかになりました。少し大げさかもしれませんが、住民の方と信頼関係が築かれた気がしました。雨の日も風の日も雪の日も、運行日はやってきます。特に、冬。事務所を構える遠野の冬は厳しく、道の凍結が怖い。そこを頼りになる地元のドライバーさんの運転で沿岸地域まで。行った先で、「大変だったでしょう」「ほらあったまって」と反対に気遣っていたこともしばしばでした。

移動図書館の活動は、一度始めたらやめられないと言われます。図書館車を待っている人との約束事だからです。本を借りたら返す。そうすればまた借りることができ。昨年の夏、大型台風が近づき、雨、そして強風の被害が心配な日に運行日がぶつかったことがありました。遠野にある事務所を出て、車で1時間ほどの沿岸の町大槌に行くかどうか最後まで迷いました。結果、行ってみようと思いのほか風も穏やかで、「こんな日にも来てくれるんだね」「台風で出かけるのやめたから、家で暇にしていたんだよ」と大勢の方が本を借りに仮設住宅から出てきてくださいます。

活動を通じてこの一年さまざまなお本をお届けしました。本は不思議です。懐かしさをおぼえたり、安らぎを感じたり。今日はここまでと、好きなところで読むのをやめられるのがいいと言われる方もいました。料理や編み物の本は、本当に「飛ぶように」借りられていきました。民宿の開業をするのに法人を設立したいと、会社のつくり方の本を借りて行かれた方、ボランティアがどこからやってきたのか知りたいので日本地図を借りて行かれた方、そのような

活動を通じてこの一年さまざまなお本をお届けしました。本は不思議です。懐かしさをおぼえたり、安らぎを感じたり。今日はここまでと、好きなところで読むのをやめられるのがいいと言われる方もいました。料理や編み物の本は、本当に「飛ぶように」借りられていきました。民宿の開業をするのに法人を設立したいと、会社のつくり方の本を借りて行かれた方、ボランティアがどこからやってきたのか知りたいので日本地図を借りて行かれた方、そのような

一人ひとりのご希望にお応えできるときは活動してよかったです。思いました。

移動図書館で行くことができる団地の数は限られています。滞在時間も長くても3時間。図書室であれば、予約も要らず、開館している間は好きなだけご利用いただけます。本がそうであるように、この2つの図書室も懐かしさをおぼえたり、安らぎを感じたりする場になつてほしいと考えています。

移動図書館活動の初日、階段を駆け下りながら「図書館、待ってましたー」とこちらに声をかけてくださった女性がいました。その声に笑顔でこたえられる活動をこれからも続けていきたいです。

2012年2月には大槌町に、4月には陸前高田市に、活動拠点となる図書室をオープンしました。さまざまな方のご厚意の賜です。

移動図書館活動の初日、階段を駆け下りながら「図書館、待ってましたー」とこちらに声をかけてくださった女性がいました。その声に笑顔でこたえられる活動をこれからも続けていきたいです。

移動図書館活動の初日、階段を駆け下りながら「図書館、待ってましたー」とこちらに声をかけてくださった女性がいました。その声に笑顔でこたえられる活動をこれからも続けていきたいです。



①今年夏まで大活躍した軽トラックの移動図書館車(写真:高橋智史)
②車も、拠点も、スタッフも増えました。大槌町の拠点、旧かねざわ小学校のグラウンドにて
③岩手事務所スタッフが勢揃い
④お絵かきの道具も積んでいく



「図書館で励まされ癒され いろんな事を学びました」

3月から図書館活動のアシスタントとして働いています。利用者さんの対応の合間をぬって、本の登録作業やチラシ、ポップ作りをしています。

仮設住宅にひきこもっていた奥さんがいました。図書室に来て風景の写真集を見ただけだったのが、だんだん読み物を読むようになり、最近はお話もするようになったのが嬉しかったです。

陸前高田コミュニティ図書館の1日は新聞を取り替えることから始まります。仮設住宅はいびきが聞こえるほど壁が薄く、集中できないからと来る人もいて、利用者が増えて活気づいています。 村上悠(むらかみ・はるか)



「風景まで瓦礫で埋め尽くされていたとき、本に助けられた人がたくさんいる」

大槌生まれです。高台にある自宅は波が来て浸水、町内の仮設住宅に住んでいます。図書館司書に憧れていたのでSVAに応募しました。仮設住宅を移動図書館車で回っていると、こもりがちだった人が、表に出てきてくれて、よかった~と思います。

かねざわ図書室には中学生から20代、年配の人まで幅広い年代が来ますが、もっと多くの人に、図書室のことを知ってもらいたい。かわいい移動図書館車を見に来るのもいいから、絵本を充実させてお母さんたちにも使って欲しいと思っています。 黒澤智美(くろさわ・ともみ)



岩手で育ったスタッフの図書室にかける気持ち

(聞き手:清野陽子)

いつもありがとう
お母さんが「図書館来たら、呼んで」って言ったから、教えてくれる!
家相の本を見て、家を建てる際の資料にしたい

- 2012年
- 2月 4日 日産自動車より寄贈を受けた移動図書館車が陸前高田で活動開始。
 - 5日 大槌町旧金沢小学校内に、「かねざわ図書室」(大槌町内拠点)正式オープン。
 - 7日 陸前高田市内の拠点となる「陸前高田コミュニティ図書館」落成式。
 - 18日 のべ貸し出し冊数が1万冊を突破。
 - 5月 12日 のべ利用者数が5000人を突破。

本がつながる会話



寝る前に佐伯泰英を読んでいると言ったら医者に怒られた。面白過ぎるので、寝る前に読むなんて言語道断!だそう。面白いかまたよろしく

育児の本をお願いします。生まれて2カ月なんですけど、黄疸がまだ消えないんです。

日本地図ありますか。日本中からくるボランティアさんの地元がどんなところか知りたい

- 2011年
- 5月 2日 岩手県での調査で、市町の図書館が大きな被害を受けていることを知る。
 - 23日 事務所となる物件探しを開始。遠野市に元工場だった建物を見つける。
 - 7月 17日 いわてを走る移動図書館活動として初めての移動図書館活動を、陸前高田市において開始。
 - 23日 大船渡市での移動図書館活動を開始。
 - 8月 2日 佐藤涼子(SVAアドバイザー)講演会「子どもたちとお話や本との幸せな出会いを」開催(主催:遠野文化研究センター・遠野市立図書館)。
 - 8月 24日 山田町での移動図書館活動を開始。
 - 30日 大槌町での移動図書館活動を開始。
 - 10月 1日 大槌町で、SVAの海外スタッフによる催し「大槌にアジアがやって来る!」(アジアのお話し会)を実施。10月8日には、アフガニスタン事務所のスタッフが来日。移動図書館活動とともに進行。
 - 11月 1日 山田町立図書館再開
 - 2日 大槌町の仮設団地集会所にて文庫活動(いわての風き本)開始。
 - 10日 図書館総合展にて実施された、1-1グランプリ2011 若手ライブラリアンのためのワークショップ式登壇(東日本大震災に向き合うとき)で優勝。
 - 20日 陸前高田市にて、枚方市より寄贈を受けた移動図書館車による移動図書館活動を、枚方市図書館職員とともに進行。
 - 12月 21日 メリルリンチ日本証券より移動図書館車の寄贈を受け、大槌町にて町長教育長を招いての贈呈式が行われる。

図書館は生きる力を吹き込む 難民キャンプでの10年

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所 副所長兼プロジェクトマネージャー ジラポーン・ラウィルン（セイラー）

2001年から難民に寄りそい図書館活動をしているセイラーは、「いわてを走る移動図書館プロジェクト」の先輩といえます。図書館は将来を切り開いていく力をつける場所だと語ります。

SVAに入るきっかけ

私は難民キャンプの学校で、英語のボランティア教員、図書館員として働いていました。当時は、教科書や学習参考書がなく、大変困ったことを覚えています。他の学校も同様で、いつかこの状況を改善したいと思うようになりました。

図書館活動が始まって

図書館員の経験がありましたが、出来上がったコミュニケーション図書館で、絵本の読み聞かせやゲーム、歌、折り紙などのイベントを目的に当たりにして、驚きました。同時に喜んで楽しく、子どもたちを幸せにする場所なのだろうと、ワクワクしました。これは、当時の難民キャンプ委員会や図書館員、そして地域の人々にとっても同じだったようです。

2000年、日本のNGOが難民キャンプの中で図書館を支援するという噂を聞き、「これが私が待ち望んでいた団体だ」と確信しました。幸いにも2001年にSVAの図書館調整員アシスタントとして採用され、現在まで難民キャンプの図書館活動を支えています。

図書館の立ち上げで難しかったのは、人々の意識を変えることでした。図書館は静かに本を読むところだという意識があり、図書館で活動が始まると、想像していたのと異なる辞めてしまった図書館員もいました。

しかし、自由に移動することもできない、新聞やテレビもない、何もない難民キャンプの中で、図書館がいかにか子どもや青年の心を癒していくものなのか明らかになり、そして子どもたちの態度がみるみる変わっていくのに接して、大人の意識が変わり、図書館が受け入れられるようになりました。

図書館は「生きる力」を与える場所

難民キャンプの図書館は、様々な役割を担っています。ミャンマー（ビルマ）国内の紛争から逃れ

てきて心の傷を抱えてしまった人の心を癒す場、高等教育への進学も難しい難民キャンプで自ら学習することが出来る場、情報が集まる場、伝統文化活動で自分たちの文化に誇りを持つことが出来る場、など多彩な機能を持ちあわせています。

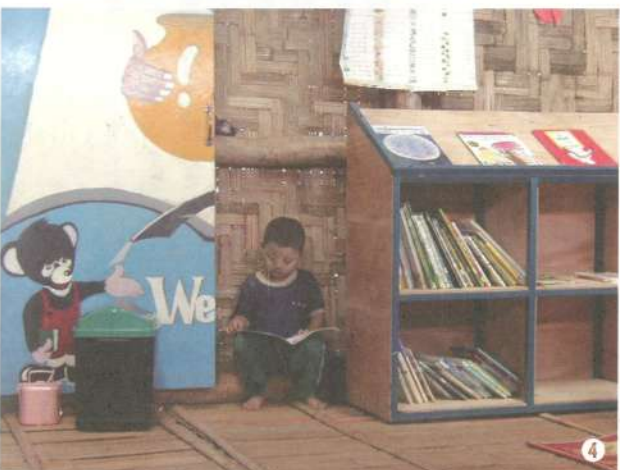
その中でも、図書館は難民の人々に「生きる力」を与える場だと私は確信しています。カレン語に「テイリオミ タテイリオミ」という言葉があります。これは「勉強しようがしまいが、ご飯は食べられる」という意味です。長

い間紛争下に置かれた人、将来への希望が見いだせない人には、教育は無力なものと見えるかもしれませんが。

しかし、図書館の本棚の裏に隠れていた小さな子どもたちを見たとき、私はハッとしました。文字の読めない年頃の子どもが、絵本を見せながら友だちに物語を語っていたのです。きっとその子は図書館員が絵本を読んでくれるのを毎日聞きながら、内容を覚えたのだでしょう。

子どもが、誇らしげに生き生きと友だちに物語を教えている姿を見て、何もない難民キャンプの中で、図書館は子どもたちに「知り、学び、考える力」を与えるものと確信しました。難民キャンプの中では多くのNGOが難民を支援する活動をしています。難民は支援だけで生きられるわけではありませぬ。自分たちの力で立って、自分たちで将来を考えて歩いていくのです。図書館は彼らに「生きる力」を吹き込むのです。

（聞き手・ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所 菊池礼乃）



①難民子ども文化祭で民族の踊りを披露
②新しい図書館の開館、子どもたちが待ちかねている（写真：渡辺有理子）
③本が大好き！
④本棚の陰で読書にひたる（写真：渡辺有理子）

未来を作る空間であること

広報課長兼東日本被災者支援事業図書館活動アドバイザー 鎌倉幸子

仮設住宅を移動図書館車で回る中で、人びとと言葉を交わしながら、カンボジアで感じたことが蘇ってきました。「人が必要としているものは、国境をこえても同じなのではないか」。本は人の心を支える、図書館を通してできることがあるという確信でした。

①カンボジアでも移動図書館車は子どもに大人気
②本の貸し出しをきっかけに会話弾む（陸前高田市の仮設住宅）



2011年4月5日、私は3月下旬に開館した宮城県気仙沼市立図書館にいた。図書館員と、避難所での炊き出しの話になった時、「食べ物食べたらなくなるけど、本を読んだ記憶は残ります。だから……図書館員として本を子どもたちに届けたいんです」と、つぶやいた一言。あれ、どこかで聞いた言葉だ。「お菓子は食べたらなくなるけど、本は何度でも読めるから好き」と難民キャンプでのカンボジアの女の子の一言だった。

私は9年間カンボジア事務所図書館事業の調整員をしていたことから、岩手事務所の立ち上げに関わった。津波により町が壊滅した東北の沿岸部。内戦により焦土と化したカンボジア。国が違えども、「本」や「図書館」の持つ役割は同じであると感じている。今回は聞いた声を紹介しながら、図書館事業を考えていきたい。

覚悟と思い

「移動図書館は約束なんです。その覚悟がありますか」

2011年5月に、移動図書館を行う可能性について聞き取り調査をしていた時に、大船渡市の図書館担当者が発した言葉である。移動図書館は決められた曜日と時間にその場所に行く。本を借り、返すという流れの中で、突然来なくなるという利用者の方が戸惑っ

てしまう。活動を楽しみにしてくれた方にとっては、連絡もなく来なくなる、切ない気持ちになる。「イベントだったら来ないでほしい」というメッセージであった。どの国の事業でも、一番大切なのは「覚悟」と「思い」だ。またその「思い」は、その地域の方たちの「思い」を自分の思いにすることである。

人の手を介す

20年前カンボジアでは「本が足りない」と、小学校にどんな形の本を配布した。しかし使われる形跡はない。「小さい時に内戦状態だったので、私自身絵本を読んだことがない」と先生方が言う。それからは本の価値や読み聞かせの方法を伝える研修会を行った上で本を配布するようになった。

今回の震災でも、本が山のように岩手県に届いた。本が入った段ボールは「誰のものなのかかわからない。さわって泥棒扱いされてはたまらない」と触る気配がない避難所もあった。利用のルールを伝えてくれる人がいること。本のおもしろさを伝えてくれる人がいること。そしていつも笑顔で迎えてくれる人がいること。図書館車も本も「モノ」である以上、命を吹き込むのは「人」である。人の手を介して、ていねいに届けていくことが大切である。



(左) 漁師がロープを編んで作る「絆だま」 (右) 片山住職



声 気仙沼から

東北だより

第5報 2012年秋～冬

「何度も祖父から津波の話聞いていたはずなのに、父母も本人も被災し、家系が途絶えてしまった」とその一家のことを気仙沼市階上地区にある地福寺の片山住職から伺った。その家は明治29年の三陸大津波の後に高台移転したにもかかわらず、東日本大震災で被災。災害を忘れないために土地の提供を受け、「鎮魂の森」「海辺の森」として整備をはじめようとしている。

そうした取り組みの中、高さ9.8mもの防潮堤の説明会が各地で開催されている。片山住職は、「防潮堤の高さや形には十分住民の

意見が反映させる必要がある」という。施設に必要な防潮堤の一部を否定するものではないが、「三陸海岸国立公園のモデル地区として、生物多様性に配慮した自然と共に生きる森の必要性」を語る。

また、しばしば使われる「絆」という言葉の由来となった「絆だま」を見せたい。船が岸に着く際に使う、船から投げた岸から手繰り寄せる船具である。想いを伝える人、受け止める人がいて、はじめて絆は生まれるんだ」

(気仙沼事務所 里見啓)

災害を忘れず今後を考える

臨濟宗地福寺 片山秀光(かたやま しゅうこう)住職

前浜コミュニティセンターの再建

14回の建設委員会を終え、再建に向けてさまざまな課題があがっている。たとえば、建設費用が当初予算を超えてしまいうる中、1つ1つの要素を見直すこと、住民参加型作業を増やすことで工費を削減することなどが検討を重ねられている。集会場建設は誰にとっても初めてのこと。行政との交渉や関係団体の調整、各種申請書類作成、建設にかかる税制についての確認など、SVAがいて助かった」と建設委員長の島山幸治さん。

前浜地区には貝塚や中世の館の跡などがあり、建設予定地からも文化財が出てくる可能性があるため、調査開始を待ちつつ、他の工程の準備を進めている。

また、防災集団移転に向けての話し合いも行われた。こうした取り組みが分らないために取り残されてしまう世帯が無いよう声をひろい、協議会のサポートをしながら計画策定を目指している。コミュニティの再建と同時に生活再建に向けての動きも始まっている。

各種申請が終了し、「埋蔵文化財調査」を残すのみ。

(気仙沼事務所 青島寿彦)



建設委員会で発言する島山幸治(はたけやま・こうじ)さん



前浜地区の中世の館の跡



心とどんな風にも飛ばされない根を

震災孤児の取材をしている記者が、子どもたちがいつも本を手に入れていることに気づいた。テレビをつけても新聞を開いても親を飲みこんだ瓦礫の風景が目には飛び込んでくる。その中で、違う世界に連れて行ってくれる本は、一瞬かもしれないが守りのような存在なのかもしれない。この話を図書館の専門家にしたら、「辛いことを忘れるというより、『変わらない』安心を求めている」というお話をいただいた。今日読んで本を、次の日に開いたら内容が変わっていることはない。この話を聞いた陸前高田市出身のスタッフから「私自身も、変わらない」という事に安心感を覚えています。この震災は何もかもが変わり過ぎた。変わらない事の方が少

な過ぎて、本の変りなきが与える安心感は計り知れないと思います」というコメントが寄せられた。山田町のおじいさんが「眠れない時に本を読む」という声を聞いた時、アフガニスタンの男の子が「絵本を読めば楽しい気持ちになって、夜ぐっすり眠れるんだ」と吹き飛ばされないように、人々の心の安定という「根っこ」の部分を本が支えている、と感じている。

情報交換をしている。「知らないこと」は不安を増幅させる。活動を通じて、必要な情報を聞いたり、利用者からリクエストを受け、その本をそろえている。

「育児書はありますか」生まれたばかりの赤ちゃんを連れてお母さんが訪ねてきた。一人目のお子さんを仮設住宅で育てている。周りには知り合いもいなく不安が多い。育児書を探しながら、自分の子育て体験を話すスタッフたち。その話を聞いていた、1人の女性が「私も赤ちゃんがいるのよ」といって話の輪に入ってきた。「命をつなぐ」ための情報と人が出会える空間になり得るのが図書館である。そしてそれが未来を作ると信じて。

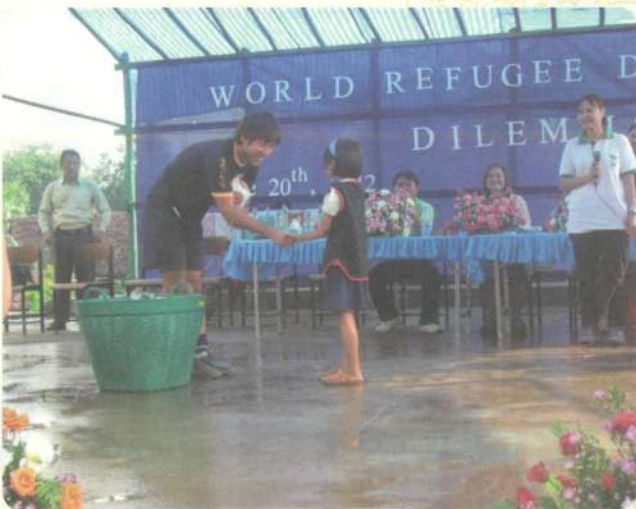
同じ場所に何っている。いつもは気丈な方が、ある本を見つけた時「この本ね、一度家が火事になって、二回目は、津波に流されて、今こでまた見つける事ができた。なくなった主人が好きだったから、帰ったらお仏壇において見せようと思う」と目を伏せながらつぶやいた。顔見知りになったからこそお話しをしてもらえることもある。カートヴォネガット・ジュニアの「スローターハウス」(早川書房)を置いてほしいというリクエストをいただいた。

引用した文章が叶う日は、いつになるだろう。沿岸部の方たちが、この本を手にとってページをめくってみようと思う日まで、雨の日も、風の日も、晴れの日も本を積んで走り続けていく。

①陸前高田図書館から津波で流されてしまった本が山となっていた
 ②お母さんに連れられた赤ちゃんを抱っこする吉田スタッフ
 ③カンボジア・ゴミを集めて売りに行く生活は厳しい(写真:瀬戸正夫)
 ④「この本が好き」どんな環境でも子どもは未来を向いている

ミャンマー (ビルマ) 難民
Myanmar (Burma) Refugee Camps

2012年
世界難民の日



丸山良明さんがメラ難民キャンプを訪問し子どもたちと交流



式典にてカレン族の民族衣装で歌う難民の青年たち



メーソット市内の高校でスタッフから熱心に話を聞く高校生たち

6月20日は世界難民の日。迫害や紛争、暴力のために自国から逃げざるを得なかった人々の勇気、強さ、そしてその決心を称える日となっています。2012年の世界難民の日のテーマは「ジレンマ」でした。これは難民が非常に厳しい選択に迫られている状況をよく示しています。

ミャンマー(ビルマ)難民キャンプでは、UNHCRやNGOの協力の下、世界難民の日の式典が開催されました。また、各難民キャンプでは、キャンプリーダーやUNHCR代表によるスピーチ、青年グループによる歌の披露や伝統舞踊公演、さらに難民の生活を描いた絵や「ジレンマ」をテーマにしたエッセイのコンテストなど、さまざまな催しが行われました。

丸山良明さんをお迎えし、サッカー交流会を開催し、会場は大変盛り上がりしました。丸山さんは難民の青年たちのサッカー教室や子どもたち・難民キャンプ委員会メンバーが参加したサッカー親善試合、さらにはコミュニティ図書館でのサッカー絵本の読み聞かせなどを行い、難民キャンプの人びとに現状を乗り越えていくための勇気を与えていました。

また、7月5日・6日、メーソット市内の高校でもタイ人に難民問題を身近なものとして理解してもらうためのイベントが開催されました。多くの高校生が参加し、難民キャンプの状況やNGOの活動について熱心に質問している姿が見られました。

■図書館事業 ナンタナティンカジョン(トー)

タイ
Thailand

アジアの研修センターへ
カンボジア事務所と
交流研修



シーカー・アジア財団事務所研修参加者一同

7月4日から6日、SVVAカンボジア事務所の所長、図書館事業のスタッフら7人と交流研修を実施。タイのスラムで20年以上に渡り、実施してきたコミュニティ図書館、移動図書館のノウハウから、現在、力を入れている研修・教材センターでの取組みまで、情報共有し、意見交換を行いました。

カンボジアで、スラムの子どもへの活動、図書館づくりなどを担当するスタッフですので、理解がスムーズです。経験をわかちあう時間は、シーカー・アジア財団図書館スタッフとつても有意義なもので、深くうなずき共感し、ハッと感得するということの繰り返しでした。

特に7年前に実施したクロントイスラム図書館の改

装は関心を持たれました。利用者の意見を取り入れ、居心地の良さを重点に家具・内装を一新した際の試行錯誤が、カンボジアのコミュニティ図書館づくりに活かされることになれば、うれしいことです。

国の状況は違っても、子どもたちに対する絵本・あそびなどの活動を通じた教育支援という点は同じです。最終日には、引き続き、相互に学び合う交流の継続を約束して終了しました。

シーカー・アジア財団とは、「アジア教育財団」という意味です。その名にふさわしく、当センターが「アジアの教材・研修センター」となることを願い、これからも精進していきます。

■研修・教材センター担当
アリッサー・ウッパシー(ギップ)

カンボジア
Cambodia

熱心な議論が交わされた
年次セミナー



スタッフ全員が揃ったところで記念撮影

6月26日から29日までカンボジア南部シアヌークビルにて年次セミナーを開きました。年に一度、スタッフ全員で、昨年と今年上半期事業の見直し・次年度計画の策定を行う会議です。スタッフは地方出張が多いため、年次セミナーは、全員が揃う貴重な機会でもあります。今年は、新規事業が開始した年。計画通りに実施できているもの、課題に直面しているものを確認し、自分たちの事業が目標にきちんと向かっているかどうかを議論しあいます。課題を引き起こしている原因が外部要因なのか内部要因なのか、どのように改善していくことができるのか、白熱した議論が展開されました。

2012年、カンボジア

はASEAN議長国となり、カンボジア政府の政策もグローバルな視点を意識したものと改革が進められています。小学校4年生からの英語教育の導入が検討されている中、アジアの中で「カンボジア」というアイデンティティをどう保つのか、これから、教育現場のあり方も問われていくのではないのでしょうか。

2015年の「国連ミレニアム開発目標達成に向けて、各国がより一層の努力を強いられる中で、カンボジア事務所においてもこれまでの経験を生かしながら、より質の高い教育支援活動を展開していく為に、自分たち自身も学ぶ努力を怠ってはいけなさと、実感したセミナーでした。

■所長 山本英里

ラオス
Laos

子どもにとって
使いやすい校舎を



ドア枠の設置状態を確認しているところ

学校教育支援事業課に配属されて2年目。校舎建設事業の課題を整理・改善し、子どもと教員にとって使いやすい校舎にするため、建築専門家に相談しながら試行錯誤を重ねています。

まず、建設の進捗状況をスタッフや建築専門家と住民と一緒に確認する際に使うチェックリストを工夫しました。建付の状態などを見ることで、住民に建築の知識が付き、完成後、年度初めと終わりに行う校舎の定期点検にも使えます。住民が進捗確認に関わることで「自分たちの学校」という意識が高まり、責任を持って維持管理していくことが期待されます。

また、進捗確認に、建築専門家が同行するようになったことも大きな改善点

です。これまでは教育省の標準設計図通りに建てられており、子どもの安全や校舎の質は保証されてきましたが、専門家の助言により、校舎の強度や安全性が更に高まっています。

たとえば、雨天時に滑りやすかったバルコニーの床表面を少し凹凸のある仕上げにすることで滑りにくくなりました。回す型のドアノブより耐久性に優れたレバー型のドアノブを採用することで、以前より維持管理が容易になり、コストも抑えることができました。

これからの子どもや教員が使いやすい校舎を建てるため、「利用者の視点に立つ」ことを忘れず、事業改善に取り組みしていきます。

■学校教育支援事業課
仁井勇佑

アフガニスタン
Afghanistan

アフガニスタン東京会合に
市民社会の声を反映



「市民フォーラム」でパネリストを務める三宅(右)写真:アフガニスタンに関する東京会合CSO実行委員会

7月8日、アフガニスタンの復興に関する会合が日本・アフガニスタン両政府の主催で開催されました。カルザイ大統領、野田総理、国連事務総長、米国防務長官など55カ国、25の国際機関の代表が参加しました。

この会合の目的は、米軍撤退後の2015年以降の「変革の10年」に国の自立を開発面で支援することの約束で、2012年からの4年間で160億ドルの支援を行うことが決まりました(日本からは5年間で30億ドル)。一方、アフガン政府は、腐敗の削減、統治、民主化などを約束し、「東京枠組み」が採択されました。

SVVAなど日本の18 NGOは、会合に市民社会の声を反映させるために実行委員

会を結成し、政府への提言書の提出、国会議員向けの学習会、メディアアワーを行いました。SVVAは7日の市民社会フォーラムのパネリストを務めました。アフガンから30の市民社会組織の代表を招聘しました。

東京会合は、国際社会は今後も復興を支援するというメッセージを発信しました。しかし教育、保健などの基礎社会サービスの強化、格差の解消、女性の権利保障の推進、NGOが活動しやすい環境づくりについての言及が弱いといった課題も残りました。

今後、日本政府はアフガンに対する国別援助計画を策定する予定で、SVVAは他のNGOと協力してこれに関与していきます。

■所長 三宅隆史

※国連ミレニアム開発目標(MDGs)とは、開発途上国の貧困問題解決のため、国際社会で合意した達成目標です。SVVAも教育分野の目標達成をめざし協力しています(くわしくは2012年番号参照)

SVAからのお知らせ

宮城県山元町・福島県南相馬市で移動図書館活動を開始

7月2日、第5回理事会が開催され、福島県及び宮城県山元町における東日本大震災支援活動「新たな対象国における事業立案指針」について審議され、承認されました。

「福島県及び宮城県山元町における東日本大震災被災者支援活動」では、宮城県山元町に事務所を開設して、同町及び福島県南相馬市において、移動図書館活動を

実施するというものです。

福島県では、単発ではありませんが、復興寄席・イベントのお手伝いという形で関わってまいりました。その中で、岩手県、宮城県と違った意味での深刻さが浮き彫りになってまいりました。福島県外の46都道府県すべてに避難されている方が約6万2千人に上り、福島県に残ったとしても、放射線の内部及び外部被ばくの影響が未知数であり、いまだに復興とは程遠い状態です。理事会では、「県外避難者への支援は？」これ以上、支援活動を広げて大丈夫

か？との懸念の声もありましたが、できることから関わっていくことの重要性が議論され、最終的には承認されました。なお、本承認をうけて、7月23日、福島県に隣接する宮城県山元町に事務所を開設。9月中の活動開始を目指します。

「新たな対象国における事業立案指針」の審議については、昨年度の東日本大震災の発災により、1年間延期となり、今回の提案となりました。この1年間で、ミヤンマー(ビルマ)の民主化が急速に進み、カレン州等において、少数

民族との停戦合意がなされたことを踏まえ、同指針について再審査が行われ、2012年内にミヤンマー(ビルマ)国内に事前調査メンバーを派遣することが承認されました。(事務局次長 市川育)



山元事務所スタッフ

SVAの日のつどいのご案内

1981年12月10日にSVAの設立総会を開催したことにちなんで、12月10日を「SVAの日」といたしました。今年も12月に「SVAの日のつどい」を開催いたします。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

日時：2012年12月1日(土) 17:00～20:00

第14回図書館総合展にブース出展します

日時：2012年11月20日(火)

～11月22日(木) 10:00～18:00

会場：パシフィコ横浜

全国から図書館関係者が集まる図書館分野では日本最大のコンベンションです。SVAは3日間ブース出展し、国内外で行っている図書館活動の紹介をします。ご来場の際にはぜひお立ち寄りください。

当日はフォーラムやプレゼンテーション、団体によるポスターセッション、企業による最新の技術や動向が伺えるブース出展など、多様な企画が行われます。

◎広報課 鎌倉幸子

人事のお知らせ

入職	三木 真冴	岩手事務所 プロジェクトマネージャー 契約スタッフ (6月18日付)
	後藤 由紀子	広報課 ウェブ担当 契約スタッフ (6月25日付)
	鎮野 誠	経理・総務課 データ管理及びIT担当 契約スタッフ (7月13日付)
	岩佐 貴美子	山元事務所事務局担当契約スタッフ (8月8日付)
	熊島 好一	山元事務所プロジェクトマネージャー 契約スタッフ (8月21日付)
	高野 竜也	山元事務所図書館活動プログラム担当 契約スタッフ (8月21日付)
辞令	白鳥 孝太	気仙沼事務所長 (8月1日付)
	古賀 東彦	岩手/山元事務所長 (8月1日付)
	鎌倉 幸子	広報課長 兼 東日本被災者支援事業 図書館活動アドバイザー (8月1日付)
退職	香川 進司	経理・総務課 データ管理及びIT担当 契約スタッフ (7月31日付)

スタッフのひとこと

好きな絵本は？

■私の好きな絵本は、「おかえし」です。引っ越しの挨拶にきたキツネのプレゼントに対してタヌキがおかえしをし、さらにキツネがおかえしのおかえしをし、と続くキツネとタヌキのおかえし合戦がおもしろくて大好きでした。昨年12月末に生まれた娘と一緒に絵本を読む日が楽しみです。(園内事業課 利根川佳子 とねがわよしこ)

■好きな絵本で真っ先に思い浮かぶのは林明子作「こんとあき」です。NHKの番組でイタリア語訳を見たのがきっかけで読みました。悲しい話じゃないのに、思い出しただけで泣いてしまいます。もし子ども頃に読んでいたら、危なっかしい二人の冒険にハラハラしすぎて、嫌いになってしまったかもしれません。(広報課 後藤由紀子 ことうゆきこ)

■子どもの頃に病院へ通っていたのですが、娯楽も無くとも退屈でした。そんな時、待合室の本箱に見つけたのがブリッグズの『さむがりやのサンタ』。岩波系の本に憧れつつも読んですぐ挫折する子どもだったので(こんなマンガみたいな絵本があるんだ!)と夢中に。今もずっと大好きです。(広報課 山田貴子 やまだたかこ)

編集後記 ■その「ピーター・パン」の絵本は、濃紺の地に星がちりばめてある抽象画でできていました。具体的に描かれていない分、「空飛ぶ子ども」のイメージが自由に膨らみます。子ども達の鑑賞に任せる点、70年代らしい前衛な試みですね。(清野陽子 せいのひょうこ)

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220
WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。

2012年10月1日発行(1,4,7,10月1日発行) 通巻267号
1985年6月28日 第三種郵便物認可

発行所 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
発行人 若林恭英 / 編集人 関高士
装丁・レイアウト 矢萩多聞 / 印刷 株式会社大川印刷

定価 550円(税込)